Bluff Archives News Letter

第4号　2025年5月
発行　　NPO法人横浜山手アーカイブス

建築家 J.H.モーガンと横浜山手

横浜開港資料館では「旧根岸競馬場一等馬見所」（1929年竣工）が今年1月に横浜市認定歴史的建造物に認定されたのを記念して、5月11日まで館蔵コレクション展示「根岸競馬場と建築家J.H.モーガン」が開催された。J.H.モーガンは、1920（大正９）年に米国から丸ノ内ビルヂィング建設のため、フラー建築株式会社の建築技師として来日。1937（昭和12）年に没するまで数多くの建築作品を残したが、横浜との関わりは特に深い。現在も横浜山手にはラフィン邸（現・山手111番館）、ベリック邸（現・ベーリック・ホール）、クライスト・チャーチ（現・横浜山手聖公会）などが残っている。

横浜居留地の建築家として

J.H.モーガン（Jay Herbert Morgan、1868-1937）は、米国ニューヨーク州バッファロー出身の建築家。1920年に丸ノ内ビルヂィング建設のため、フラー建築株式会社の建築技師として来日し、米国の先進的な施工技術を日本に伝えるのに大きな役割を果たした。２年後には自らの設計事務所を日本郵船ビル内に開設。1926（大正15）年に横浜へ移り、後に山下町の自らが設計したユニオン・ビルディング内に事務所を置いた。公私にわたって支えた女性・石井たまのさんとの出会いもあり、モーガンは関東大震災後も日本に留まり、米国で培った豊かな建築経験を活かし、施主の多くは外国人や外国籍の会社であったが、多様な建築を設計した。モーガンが横浜で手がけたのはヨコハマ・カントリー・アンド・アスレチック・クラブ（YC&AC）の新しいパビリオンを始め、関東学院の校舎、山手の外国人住宅、根岸競馬場、銀行やアメリカ領事館、クライスト・チャーチなど、横浜居留地の主要な建物が多く挙げられる。

スパニッシュ・スタイルの住宅

横浜山手にはJ.H.モーガンが建てた外国人住宅が２つ現存している。その一つ、ベリック邸（現・ベーリック・ホール）は、イギリス人貿易商B.R.ベリック氏の邸宅として、山手72番aに1930（昭和５）年に建てられた。約600坪の敷地に建つ木造二階建て地下一階の建物は、外壁はクリーム色のスタッコ仕上げ、オレンジ色の屋根瓦、玄関ポーチには３連アーチが付き、四つ葉と方形が組み合わされたクワットレフォイルと呼ばれる小窓などの多彩な装飾が施され、スパニッシュ・スタイルを基調とした華麗な邸宅である。内部は、白と黒のタイルが敷かれた玄関ホールを挟んで、右側に広い居間とパームルーム、左側に客間、化粧梁組天井が特徴の食堂、配膳室や台所、二階には寝室４室が並び、夫人の寝室にはサンポーチが付いている。階段手摺りや壁泉などの装飾も美しい。スパニッシュ・スタイルは、固よりスペインを源流とする様式であるが、日本にはアメリカを経由して持ち込まれ、大正末期から昭和初期にかけてまず関西で流行し、関東にも伝播した。モーガンが手がけた住宅は度合いは異なるものの全てスパニッシュ・スタイルである。事務所にカリフォルニア大学バークレー校で建築を学んだ川崎忍が在籍したことも大きかったようだ。

モーガンが設計したもう一つの住宅、ラフィン邸（現・山手111番館）もスパニッシュ・スタイルの住宅である。ラフィン邸は、1926（大正15）年にアメリカ人両替商J.E.ラフィン氏の居宅として建設された。外壁は白いスタッコ塗り、屋根は赤い瓦で葺かれ、地下一階、地上木造二階建て。３連のアーチをもつ玄関ポーチはパーゴラ（屋根のない藤棚）になっているため、ベリック邸とは異なる印象を与える。内部は建築図面上では中央に居間（現ホール）を配し、周囲を４つの個室、食堂、厨房などが囲む。居間は戦前の西洋館には珍しい吹き抜けになっており、二階には回廊やスリーピング・ポーチを配する。この邸宅のスパニッシュ的要素はファサードに限られ、他の部分にはあまり見られない。モーガンは計画を決定する際にスタイルとしての完全さより、日本の気候風土との対応を重視し、施主にとって最良の住宅のあり方を探そうとしたのでないかと言われている。（N）

<参考資料>
水沼淑子著『ジェイ・H・モーガン−アメリカと日本を生きた建築家−』
関東学院大学出版会、2009年